

について、原則として毎週1回ずつ調査してきた。また性格検査など対人関係とかかわりがあると思われる事柄についても臨時的に調査した。2学期も間隔を広げて調査する予定である。

現在、一学期に収集したデータを整えた段階であり、

分析は今後に残されている。対人関係や集団構造の発達の様子がどの程度明らかにされるか楽しみにしている状態である。また長期にわたってご協力いただいた附属中学校の先生方のお役に立てるような結果が得られれば、と願っている。

研究経過報告 — '78年秋～'79年夏 —

小 嶋 秀 夫

ここ1・2年、つくづく思うことは、自分が1年間外国で過ごしたことの最大の効果は、研究面での脱制止であった。自分の専門からかなり離れた研究領域であっても、興味を持たば大いに発言するだけでなく、場合によっては積極的な研究活動をもする——。ちょうど、自分の内面的状態とも適合していたのか、このようなモデルの何人かに触れることによって、「専門外のことに口出しすべきではない」という精神的制約が、かなり緩み始めたのである。それが有意味な結果をもたらすのか、それとも一時の空騒ぎで終るのかは、まだ見極めることができない。

〔歴史的視点から見た親子関係と児童発達〕 昨年度に述べた「児童観」は、この領域での中心的概念の1つである。現在までの仕事は、理論的（日教心21回総会発表予定）、概念的（日教心20回総会）、方法論的（日教心20・21回総会）、歴史的（教育学講座3・4巻、学習研究社、1979）なものであった。これらは、まだまだ拡大・深化させる必要があるが、徐々に実証的研究を加えて行く段階が近付いていると思う。子どもの発達に、それについてのおとなの信念体系が重要な役割を果すという考えは、ETSのIrving Sigelも持っていることが分った。私とは×同じ期間（2年強）のうちに、少くとも実証的データに関しては、彼が何歩も先んじていることが分り、シ

ョックであった。しかし、私は、歴史的背景から押えて行くことの有意味性を信じている。児童発達研究と歴史的・社会的要因の問題については、児童心理学の進歩、1979年の概観の章でも述べた。

〔親子関係〕 親子関係を中心とした人間関係の捉え方を分類する2次元のカテゴリーを提案した（日教心20回総会記念シンポジウム、川島書店 近刊）。また、人間の生活と発達に対して、家庭での経験がもつ意義を明かにする研究法の枠組みを検討した（古畑・小嶋編 家族心理、有斐閣 近刊）。

〔発達研究法〕 児童心理学の進歩、1979の概観の章では、発達研究を分類する1つの方法を提案した。また、発達に関する諸概念と研究法を、私なりに整理してみた（金城ほか 心理学概論、有斐閣 1980）。

〔認知様式〕 MFF（熟知図形組合せ）検査の日・米・イスラエルの比較をした論文が出た（Salkind, Kojima, & Zelniker, Child Development, 1978, 49）。MFFにおける選択位置偏好（Kojima, 1976）による誤数の測度の信頼性の低下は、北アイルランドでも見出された（Cairns & Cammock, Developmental Psychology, 1978, 14）。また、場依存性の論文（Kojima, 1978）については、デンマークのNyborgと誌上での論争を進めていくことになっている。（1979年8月）

研 究 経 過 報 告

池 田 博 和

昨年11月に本教室員になって以来、すでに10カ月が過ぎようとしている。着任後の初仕事は、文部省科学研究費の申請書を書くことであったが、最近これがとおったという内定通知を受け、これほど嬉しいことはないと思っている。

年が明けて1月早々、第12回全国学生相談研究会議が

京都で催されたが、これに出席し、学生のような臨床的問題をきいている中で、私の中にある考えが醸成されていった。そこで受けた刺激が大きな契機となって、前からの課題であった「青年期危機 — 現存在分析の立場から —」（「心理臨床の実際 第8巻 青年期危機」福村出版 印刷中）が書きあげられた。これは方法論的な立

場の記述に主眼があるが、その中でもわれわれ心理臨床家がクライアントとともに目指すべき「現実」の質が明確化されたのではないかと思う。

この線に沿うものとして、田畑治をはじめとする共同研究者と数年来、「臨床青年心理研究会」の集まりを持っているが、今年の本巻に「臨床青年心理学研究（Ⅳ）—女子症例に関する諸報告—」と題して、「序悦」（本紀要第24巻）の理論的方向づけに対応する具体的実践例による若干の考察をまとめることができた。

また、女性の同一性拡散の問題は、男性のそれに比べると「人生周期」の各段階にわたってより散在的に存していると思われるが、こうした観点をも含め、かなり劇的な生活史と治療経過をたどったある女性症例については、今年の東海心理学会第28回大会において発表された（「ある不安神経症者の治癒転機」）。この詳細も本巻に掲載される予定であったが、不意に間にあわなかったのが残念である。

科学研究費の助成を受けたのは、村上英治、土川隆史（文学部、学生相談室）との共同研究になる「名大式ロールシャッハ技法における“思考—言語カテゴリー”の再構成」のプロジェクトである。これも私の10年来の関心の的であるが、今後いよいよ本格的に取り組みねばならなくなってきた。

もうひとつの関心事である予防精神衛生の視点からの幼児自閉症や精神分裂病の成因論を含めた家族関係論についても、秋頃までには何とかまとめあげたいと考えている。

この8月はじめには、河口湖畔で行われた学生相談研究会議の主催になる学生相談関係教官エンカウンター・グループに出席することができた。これは私にとって興味深い新鮮な体験であったが、この意味が内的に熟し深化していくためには、まだいくばくかの時間が必要であろう。

研 究 経 過 報 告

村 上 隆

53年8月から54年7月までの経過を述べる。

(1) 3相データ解析

今年度は共同研究としては進展せず、3相因子分析の1変種に関する考察を単独で本紀要に執筆したにとどまった。このモデルは、昨年度この欄で述べた“職業レイネステスト”の分析の途上で生れてきた。決して机上のモデルではないつもりである。これによる分析の結果昨年度述べた結論は変更を予儀なくされ、発表は慎重を期することにした。いずれにしても、この過程でデータに含まれる情報をいかにして取り出すか、という問題について多くの貴重な体験をした。今後、このモデルについても幾つかの問題点が出現してくるであろう。いわゆる3相データを抱えておられる方には、是非一度ご利用いただき、感想をお聞かせいただければ幸いである。

(2) 心理物理的尺度構成

これも引き続き、difference scaling の検討を行なった。今年度は大型計算センターの端末が当教室でも利用可能となったので、これを利用した on-line 形式の実験を行なった。これについては、日本心理学会第43回大会

において発表されるであろう。こういった手法は、手法自体に意味があるのではなく、それを通して人間の判断メカニズム、または心理量の特徴といったものにアプローチすることに意味があるわけである。ここ3年間ほどは、手法の開発にのみ関心が向きすぎていたくらいがあったので、今年度は、判断メカニズム、特に比判断と差判断の矛盾について検討する実験を行ないたいと考えている。

(3) 長期記憶検索モデル

漢字を材料にした長期記憶検索の時間的過程を説明するモデルを構成する試みを行なった。これは研究生鳥居祥子との共同研究であった。最近流行の cognitive psychology をちょっとのぞいてみた、という感じであるが現在のところ、今までの指数モデルのような単純なことではない、ということが明らかになったという程度である。一部は今年度の東海心理学会において発表した。今後は、コンピュータプログラムとしての理論構成の方向を目指すべきであろうが、現在のところ手を付けていない。